

# 日本語の本を読むことを促す要因

## —日本語による読書行動モデル構築の試み—

楊 嘉寧<sup>1</sup>・井上 弥  
(2019年1月8日 受理)

Factors that prompt international students to participate in Reading activities  
—Using path analysis to develop a relational model—

Jianing YANG<sup>1</sup> and Wataru INOUE

**Abstract:** This study examines factors that prompt international students in Japan to participate in Reading activities, which was based on the Theory of Planned Behavior. 50 Chinese students in Japan responded to a questionnaire about their Japanese book-reading activities. Path analysis revealed a relation between intention of L2 reading, subjective norm of L2 reading, attitude to L2 reading, and perceived behavior control to L2 reading. However, the reliability and validity of the model was not enough. This result suggest that further consideration will be needed.

**Key words:** Theory of Planned Behavior, L2 language, reading activities

**キーワード:** 計画的行動理論, 第二言語, 読書

### 問題と目的

大学生にとって、読書は勉学のためであり、さらに社会人となるための人格形成や教養を身に付けるための手段にもなっている。グローバル化の進展の中で、多くなっている留学生にとっては、読書行動を第二言語で行う場合が多いと考えられる。ところが、脇田・村上(2018)の調査によると、留学生は4人に1人の割合で本を読んでおらず、読むとしても母語の本をより多く読んでいる現状が示された。

第二言語の読書が積極的に行われていない理由として、一つ目には、読書という行動自体の選択が自由であるということがあげられる(秋田, 1992)。この点については、母語の読書も同様といえるが、小学校や中学校では熱心な読書教育が行われているのに対し、大学生では、読書は学校から強く強制されなくなり、選択の自由が個人にゆだねられることが多くなっている。そのため、読書離れが進行していると考えられる。二つ目に考えられる理由は、第二言語の読書という行動の必然性が低いことである。読みたい本の母国語版もある場合、または母国語の本だけで満足できる場合、自然に第二言語の本を避ける傾向があると考えられる。以上の理由から、第二言語の読書は積極的に行われていないのであろう。

しかし、第二言語で読書をするという行動が、第二言語の語彙量や読解力などといった言語の発達に良い影響を及ぼしていることが、多くの第二言語習得に関する研究により明らかにされている(雪丸, 2012; Beglar, Hunt, & kite, 2012)。この

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期教育学習科学専攻

ほか、第二言語で読書することを通して、留学先の国の文化や社会をより深く理解することも考えられる。そのため、留学生に、如何に第二言語の読書を促せるのかを検討することは有意義だと考えられる。

このような特定の行動の促進を扱っている先行研究としては、計画的行動理論の研究が挙げられる。計画的行動理論によれば、強制ではない個人の行動は、その行動をしようとする個人の行動意図 (behavior intention) によって決定され、さらにその行動意図は、該当行動に対する「態度」(attitude)、「主観的規範」(subjective norm) と「行動統制感」(perceived behavior control) によって規定される (Figure 1)。具体的には、「態度」は、ある対象物に対する肯定的あるいは否定的な心理的傾向である (Ajzen, 1992)。主観的規範とは、両親や配偶者、友人などの重要な他者がその行動を期待しているかと考えているかどうかに対する認知である (Ajzen & Fishbein, 1980)。ただし、個人がその行動に肯定的な心理的傾向を抱いているとしても、また重要な他者がそれを求めたとしても、自分にとってその行動をとることが難しいと感じる時には行動は生じし難いとも考えられる。そこで、行動統制感という要因が加えられ、行動の難しさを扱った (Ajzen, 1991)。この 3 つの要因は相互に関連し合いながら意図に影響を及ぼしているが、いずれがより重要であるかについては状況によって異なる。

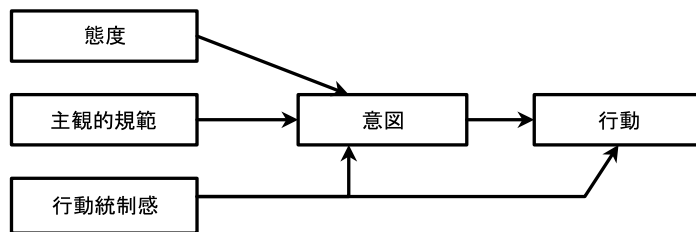


Figure 1 計画的行動理論のモデル

計画的行動理論が行動を促すのに有効であることは、多くの研究によって示されている。例えば、女子のダイエット行動 (中原・林, 2005)、いじめ場面における傍観者の援助行動 (白木, 2013)、未婚化に関する要因の検討 (伊東, 1997) など が挙げられる。また、計画的行動理論が読書行動にも適用可能であることを実証した研究としては、Miesen (2003) や van Schooten & de Gloppe (2002) の研究が挙げられる。Miesen (多読 P28) が、518名の成人を対象とし、母語の読書行動について調査した。計画的行動理論に含まれる「態度」「主観的規範」「行動統制感」を測定するため、各要素についての質問紙が使用された。また、「読書意図」については、今後6か月以内に文学を読もうとする意図について、どの程度読もうと考えているのかと、そのために努力をどれだけする意思があるかを調査した。その結果、読書に対する態度と読書行動の統制感が多面的な下位因子から構成されており、特に、読書に関わる行動統制感が強ければ、これから読もうとする意図も強くなることは明らかになった。また、統制感の下位因子の一つである「能力」は、実際の読書行動を有意に説明していることが実証された。また、van Schooten & de Gloppe (2002) は、13~15歳のオランダの中学生の読書行動を調査している。彼らは、態度を認知的態度と感情的態度と独立させて検討を行った。その結果、生徒は読書しようとすることは認知的態度によって推測され得ること、主観的規範は読書意図に僅かながら貢献し、行動統制感は意図と全く関連がないこと示された。このことから、読書行動を促進するためには、読書が与え得る利点を示すことが必要であり、主観的規範と行動統制感に影響を与えても効果がないことがわかった。

一方、種村 (2014) は、日本人英語学習者を対象に、計画的行動理論に基づき、英語多読行動を促進する要因を検討した。この研究では、「態度」「主観的規範」「行動統制感」「意図」それぞれに含まれる下位因子が明らかにされた。具体的には、態度は、認知的態度と感情的態度に分けられ、認知的態度は「意欲的」因子、「読解力」因子、「実利」因子からなり、感情的態度は「愛好」因子、「不安」因子、「心地よさ」因子、「煩わしさ」因子からなることが示された。そして、主観的規範は、「規範的信念」因子、「他者期待」因子から成り、行動統制感は「英語力」因子、「時間」因子、「資質」因子、「支援」因

子、「授業外」因子から成り、意図は「独行」因子、「関わり」因子から成ることが明らかにされている。ただし、実際の英語多読行動について検討した結果、「態度」「主観的規範」「行動統制感」「意図」を使う本来の計画的行動理論のモデルを採用したほうがデータとモデルの当てはまりが良いことが示唆された。英語の多読意図に、感情的態度と行動統制感が強く影響を与えており、これにより英語多読行動を促せることが示された。

母語の読書、外国語の読書の先行研究を踏まえれば、第二言語による読書も計画的行動理論の枠組から検討することが有効であると考えられる。そこで、本研究では、在日留学生を対象に、如何に第二言語である日本語で読書させるのかに焦点を当て、日本語による読書行動の促進を検討することを目的とする。その際、種村（2014）が用いた尺度を援用し、種村が構築した英語多読行動モデルを参考にした。本研究においても、行動を予測する枠組みを扱っている計画的行動理論を取り上げ、計画的行動理論の構成要素を独立変数にする第二言語読書行動モデルの構築を試みる。また、本研究では、基本的な読む能力が保証された状態での第二言語の読書を検討するため、第二言語である日本語の能力を N1 レベルと設定した。

ところが、第二言語の読書は、母語の読書と様々な側面で類似していることが指摘されている（Bunch, Walqui, & Pearson, 2014）。まず、認知的な面においては、母語の読書能力が第二言語の読書能力を規定していることが指摘されている（Brevik, Olsen, & Hellekjær, 2016）。一方、情意的な面の読書態度について、Granena & Tragant（2015）は、母語の読書に関する諸要因と第二言語による読書との関係を調べた結果、第二言語の学習成果と母語の読書に対する肯定的な態度には関連があることを見出している。また、読書の遂行は、身体反応と関連していることが指摘されている（小川, 2001）。遂行されやすいと思われる好きな読書の内容であれば、嫌いな内容より、心臓血管系における身体的および心理的ストレス反応は少ないことが指摘されている。

計画的行動理論では、行動の意図を高めると考えられる要因を新たに追加することによってモデル全体の予測力が高まると考えられている（Ajzen, 1991）。そこで、本研究では、第二言語による読書を多面的に検討し、その生起、促進につながるモデルを導くために、上述した計画的行動理論の枠組みに、新たに母語の読書体験と身体的反応を組み込むことにした。

## 方法

### 調査対象者

日本の国立 H 大学に在学している 50 名中国人留学生がこの研究に参加した（男性 13 名 女性 37 名）。調査実施の際に、調査協力者の匿名性が保証されること、回答が研究以外の目的で使用されないことが伝えられた。

### 調査内容

本研究で使用する尺度は以下のものであった。

①母語の読書状況：母語の読書状況を測定するため、「母語の本なら、自分によく読む方だと思う」「母語の本を読むことが好きだ」の 2 問を用いた。

②身体的反応：和田（1987）を参考に、「日本語の読書をすると疲れる」「日本語の読書をすると眠くなる」の 2 問を用いた。

③計画的行動理論に関する項目：Ajzen（1992）及び種村（2014）を参考に、在日留学生の日本語による読書に適合する項目を用いた。具体的には、日本語読書に対する「認知的態度（9 項目）」「感情的態度（7 項目）」「主観的規範（5 項目）」「行動統制感（5 項目）」「読書意図（3 項目）」を作成した。加えて、秋田を参考に、使用頻度が高い読書量指標である月間読書冊数を用い、「第二言語の読書行動」を測定した。

質問項目は Table 1 に示した通りである。なお、評定はすべて 5 段階評定であった。質問項目中の逆転項目への回答は、1 点を 5 点に、2 点を 4 点にというように逆転させて集計した。

### 調査手続き

調査は SNS グループを通して協力者を募集した。「このアンケートは、留学生たちの日ごろの日本語の本を読むこと（日本語の読書）についての意見を聞くものです。成績とは関係なく、また、無記名調査ですから、ありのままを答えてください

い」という教示を行った。また、「『読書』や『本』という場合、授業や研究のための教科書・参考書を除き、紙書籍と電子書籍の両方であると考えてください」と指示した。

## 結果

### 日本語読書の実態

まず、月間の日本語の読書冊数への回答により、在日中国人留学生の日本語読書実態を統計した。その結果 (figure 2), 0冊が16% (8人), 1冊未満が58% (29人), 1~2冊が4% (2人), 2~3冊が22% (11人), 3冊以上が0% (0人)であった。

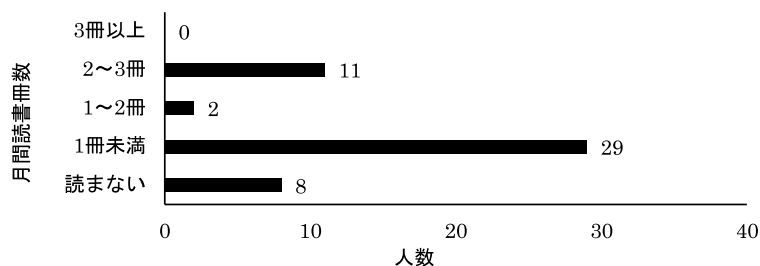


Figure 2 日本語読書の実態

### 各尺度の分析

各尺度を構成する項目の内的整合性を確認するために $\alpha$ 係数を算出した。母語の読書状況 ( $\alpha=.91$ ), 身体的反応 ( $\alpha=.57$ ), 認知的態度 ( $\alpha=.71$ ), 感情的態度 ( $\alpha=.74$ ), 主観的規範 ( $\alpha=.78$ ), 意図 ( $\alpha=.73$ ) はそれぞれある程度の信頼性が確認された。そのため、以下の分析では各項目の合計点を母語読書状況得点, 身体的反応得点, 認知的態度得点, 感情的態度得点, 主観的規範得点, 意図得点とした。

ただし、行動統制感の信頼性 ( $\alpha=.31$ ) が低く、十分な内的整合性が確認できなかったため、因子分析 (最尤法・プロマ

Table 1 行動統制感尺度の因子分析の結果

	I	II
自分には日本語の読書をするための十分な日本語単語量を持っていると思う	.922	.201
私には日本語の読書をするための十分な日本語力があると思う	.597	-.240
自分の日本語力に適している本は多いと思う	.522	-1.36
授業や研究以外の時間では、日本語の読書をするための十分な時間がない	-.015	.645
授業のレポートや他の宿題をしなければならぬので、日本語の読書をする余裕がない	-.023	.561
因子相関行列	I	
	II	-.273

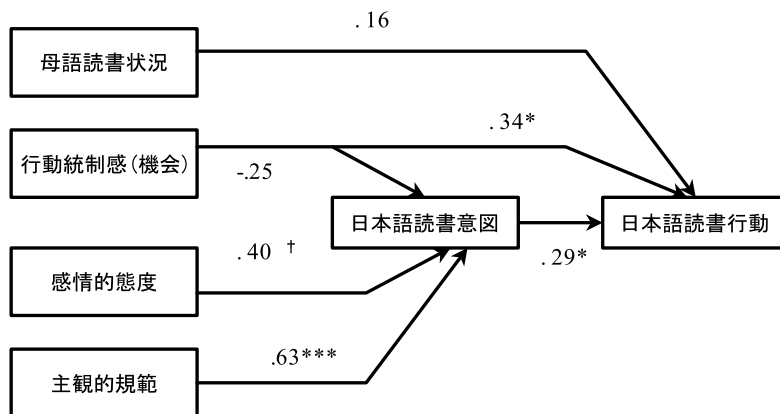
ックス回転)を行った。スクリープロットや因子の解釈可能性を考慮し、Table 1 に示した 2 因子解を採用した。第 1 因子は、個人の第二言語能力自体に関する項目であったため、「日本語力」因子と命名した。第 2 因子は、一時的な読書の機会があるのかに関わる項目からなっていたため、「機会」と命名した。各因子の  $\alpha$  係数を算出したところ、「日本語力」因子は.72、「機会」因子は.54 となった。機会因子の  $\alpha$  係数は十分に高いとは言えないが、ある程度の信頼性は確認されたと判断した。

また、認知的態度、感情的態度、主観的規範、意図、及び行動統制感の 2 因子のそれぞれの記述統計量及びお互いの相関を Table 2 に示す。

Table 2 表尺度の記述統計量及び尺度間相関 (N=50)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	$\alpha$ 係数	1	2	3	4	5	6	7	8
1 母語読書状況	7.02	2.19	.91	—	.149	-.013	.276	.084	-.100	-.069	.178
2 身体的反応	5.88	1.83	.57		—	.144	.522**	.160	.181	.016	.332*
3 認知的態度	33.30	4.50	.71			—	.250	.575**	.313*	.012	.495**
4 感情的態度	22.38	4.74	.74				—	.178	.422**	-.253	.438**
5 主観的規範	18.64	4.17	.78					—	.337*	.088	.575**
6 行動統制感 (日本語力)	10.04	2.61	.72						—	-.231	.427**
7 行動統制感 (機会)	5.10	1.76	.54							—	-.250
8 意図	10.40	2.91	.73								—

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$



\*\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$  GFI=.84, AGFI=.69, RMSEA=.18

Figure 3 第二言語読書モデル

### 日本語読書行動モデルの検討

計画的行動理論の枠組に基づき、「日本語読書行動」に影響を与える要因を検討するため、本調査で得られた各尺度得点を用いてパス解析を行った。パス解析においては、探索的モデル特定化を行い、データの当てはまりは比較的良好となったモデルを Figure 3 に示した。しかし、本研究で得られたモデルは CMIN ( $\chi^2$ 値)=28.86 (df=11, $p$ =.01)、適合度は GFI=.84, AGFI=.69, CFI=.59, RMSEA=.18 であった。GFI, AGFI, CFI は.90 以上, RMSEA は.05 未満という一般的に基準から

は、適合度は低いが、このモデルから、次のような関係が示唆される。日本語読書行動に対するパスを確認すると、意図及び行動統制感（機会）からのパス係数がそれぞれ有意であった。意図に対するパス係数は、感情的態度が有意傾向、主観的規範が有意であった。

## 考察

本研究の目的は、計画的行動理論を用いて、留学生は第二言語の本を読むという行動を規定、促進要因を明らかにすることであった。

まず、今回の調査では、在日留学生で一ヶ月に1冊も本を読まない不読者は16%、脇田・村上の調査結果より低い、月間読んだ冊数は1冊未満の人の割合が最も多いということを含ませてみれば、第二言語の読書活動を生起させ、促進させる要因を検討することの重要性が示唆されている。

第二言語読書行動モデルの構築の予備的研究として、パス図を読み取ると、まず、第二言語の読書行動をする意図には、主観的規範の寄与が強く、感情的態度はやや弱い寄与が認められる。このことから、第二言語の読書を行うことに対する周囲の人間の期待に強く認知しているほど、第二言語の読書をしようとする意図が強くなることが示唆される。このことを踏まえれば、留学生の第二言語での読書を促すには、留学生本人に働きかけるより、周囲の友人など重要な他者の役割を活性化するほうが効果的である可能性が示された。一方、本研究の結果では、態度のうちの認知的態度においては寄与が認められなかったことから、第二言語の読書をするのが言語の発達や将来のキャリアに役立つといった積極的な認知的態度を抱いても、読書の意図に繋がらない可能性が示唆された。第二言語の読書の意図を持っている人は、第二言語の読書が好き、楽しいといった肯定的な心理的傾向を備えている可能性が高いと推測される。このことから、留学生の第二言語での読書を促すには、先に第二言語での読書についてポジティブなイメージを与えたり、気軽な第二言語読書体験をさせたりすることが必要であろう。

次に、実際の第二言語の読書行動に影響を与える要因として、読書の意図、及び読書するための時間と余裕に関する行動統制感が重要だということが分かった。このことから、第二言語による読書は、読書しようとする意図に加えて、第二言語で読書する時間と余裕に関する統制の信念に影響されている可能性が考えられる。意図は、ある行動を行うことに対して準備ができて心理的状態を意味しており（Ajzen, 1991）、第二言語の読書をしたいという強い意志を持っている人ほど、実際に第二言語での読書をしていることが示唆された。一方、時間と余裕に関する行動統制感については、種村（2014）が指摘するように、Miesen（2003）が「読書をするための自由な時間」が行動統制感の構成要因であると指摘していることを考慮すれば、読書するための時間と余裕は、母語と第二言語を問わず、読書行動と関連する要因であるといえよう。特に、本人が第二言語での読書をするための時間と余裕があると判断すれば、読書意図や他の要因の程度に大きく依存することなく、直接に第二言語での読書の行動する可能性が示唆された。一方、行動統制感（機会）から読書行動へのパス係数は「.34」と高いとは言えないが、正の影響がある。一方で、意図を経由して、行動統制感（機会）から日本語読書意図（-.25）と日本語読書意図から日本語読書行動（.29）の係数をかけた「-.07」のわずかな負の影響となることが示された。授業などから解放されて日本語の読書をする時間の余裕があっても、日本語の読書をするかどうか（読書の意図）を考えてしまうと、実際の行動を妨げる可能性がある。

以上の議論から、留学生の第二言語での読書を促すには、周囲の他者との連動を重視すること、気楽な第二言語での読書活動を体験させる必要性が示された。また、学業以外で時間と心理的な余裕がある時間は、第二言語での読書を生起させる良いタイミングであることも窺えた。ただし、モデル全体の適合度が悪いいため、実際の第二言語読書行動を十分説明しているかどうかは、更なる検討が必要である。

## 引用文献

- Ajzen, I. (1991) . The theory of planned behavior. *Organizational behavior and human decision processes*, 50(2) , 179-211.
- Ajzen, I., & Driver, B. L. (1992) . Application of the theory of planned behavior to leisure choice. *Journal of leisure research*, 24(3) , 207-224.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. (1980) . Understanding attitudes and predicting social behaviour.
- 秋田喜代美. (1992) . 大学生の読書に対する捉え方の検討--読書量と捉え方, 感情の関連性. *読書科学*, 36(1) , p11-21.
- Beglar, D., Hunt, A., & Kite, Y. (2012) . The effect of pleasure reading on Japanese university EFL learners' reading rates. *Language Learning*, 62(3) , 665-703.
- Brevik, L. M., Olsen, R. V., & Hellekjær, G. O. (2016) . The complexity of second language reading: Investigating the L1-L2 relationship. *Reading in a Foreign Language*, 28(2) .
- Bunch, G. C., Walqui, A., & Pearson, P. D. (2014) . Complex text and new common standards in the United States: Pedagogical implications for English learners. *Tesol Quarterly*, 48(3) , 533-559.
- Granena, G., Muñoz, C., & Tragant, E. (2015) . L1 reading factors in extensive L2 reading-while-listening instruction. *System*, 55, 86-99.
- 伊東秀章. (1997) . 未婚化に影響する心理学的諸要因: 計画行動理論を用いて. *社会心理学研究*, 12(3) , 163-171.
- 雪丸尚美. (2012) . 日本人大学生に対する英語多読活動の成果と課題. *西南学院大学言語教育センター*(2) , 21-36
- Miesen, H. W. (2003) . Predicting and explaining literary reading: an application of the theory of planned behavior. *Poetics*, 31(3-4) , 189-212.
- 中原純, & 林知世. (2005) . 女子大学生はなぜダイエットをするのか?(1) : 計画的行動理論 (TPB: Theory of Planned Behavior) を用いた, ダイエット行動のメカニズムの解明. *生老病死の行動科学*, 10, 71-85.
- 中原純, & 林知世. (2005) . 女子大学生はなぜダイエットをするのか?(2) : 計画的行動理論 (TPB: Theory of Planned Behavior) を用いた, ダイエット行動のメカニズムの解明. *生老病死の行動科学*, 10, 87-100.
- 小川栄一. (2001) . 読書課題遂行時の心臓血管系反応に及ぼす音読・黙読, 読書ペース, Type A 行動パターンおよび嗜好の効果. *生理心理学と精神生理学*, 19(1) , 25-31.
- 白木優馬. (2013) . いじめ場面における傍観者の援助行動を生起させるには—計画的行動理論および傍観者の自己認知からの検討—. *教育心理学フォーラム・レポート*, FR-2013-02.
- 種村俊介. (2014) . 英語学習者の多読行動を規定する構成要素の内部構造の記述と 多読行動モデル構築の試み (Doctoral dissertation, 名古屋大学) .
- van Schooten, E., & de Gloppe, K. (2002) . The relation between attitude toward reading adolescent literature and literary reading behavior. *Poetics*, 30(3) , 169-194.
- 和田正人. (1987) . 高校生の読書の構造的な研究. *読書科学*, 31(4) , 133-145.
- 脇田里子, & 村上康代. (2018) . 学部留学生の読書活動に関する調査報告. *日本語教育方法研究会誌*, 24(2) , 74-75.
- Yamashita, J. (2004) . Reading Attitudes in L1 and L2, and Their Influence on L2 Extensive Reading. *Reading in a foreign language*, 16 (1) , 1-19.